

# いもう 葦毛通信



ヒメカンアオイ

平成 27 年 1 月 29 日  
豊橋市文化財センター  
TEL : 0532-56-6060

No. 18

## 1、平成 26 年度中間報告一3

M地点は木の伐採、除草が進み、現在はN地点の作業に入っています。M地点南西側からN地点にかけては、林縁部の木を幅 2 mほど伐って森を押し戻し、森林化した湿地を元に戻す作業をしています。林縁部には低木やツル植物、コシダ等が繁茂し、マント・ソデ群落を形成しています。高さも幅も 1~1.5mほどで林縁部に沿って続いています。この外側（湿地側）はネザサ群落になっているところが多く見られます。また、ネザサ群落のさらに外側（湿地側）にはヌマガヤ群落になっているところも見られます。

マント群落を形成しているコシダは、盛り上がり土手状になっていますが、葉が緑色をして生きているのは、外側だけでした。土手の内部は、枯れた茎や葉が堆積しており、下に行くほど密になっています。特に地表近くは分解していない茎や葉が厚く堆積しています。つまり、最初に発芽して成長したコシダが枯れて堆積して、その上に覆いかぶさるようにして次のコシダが成長し、また枯れてさらにその上に延びるといった形で、時間をかけて形成されたものだということが分かりました。



島状部のコシダ群落の断面



M地点マント群落（除去前）

M地点マント群落（除去後）

林縁部には、湿地性のクロミノニシゴリやノリウツギなどが見られますが、森の中には湿地性の木は見られません。つまり、湿地性の木があるところまでが、かつて良好な湿地であった可能性が高いと判断できるので、この範囲の木を伐っています。地表面にはコシダの枯れた葉や茎が堆積しており、マット状になっています。これもできる限り除去して、土の面を出すようにしています。特に、M地点の木道沿いはハルリンドウが多く見られるところで、明るくなることにより、開花数が増えると予想しています。

林縁部の内側（北側）はP地点にあたり、常緑樹と落葉樹が混じった暗い森です。マント群落のすぐ内側には、コシダ群落広がっています。このコシダ群落は、盛り上がることなく、低く平らに一定の面積で分布しています。P地点は、今年度は手をつけずそのままにしています。また、マント群落に関しては、除去することにより森の中が乾燥化してしまうので残した方がよいという意見もあります。確かに、現状の森をそのまま残すということであれば、マント群落を残した方が



P地点の森の中のコシダ群落



M地点西側作業前（南から）

・写真中央にコシダを中心にしたマント群落が地表近くを横方向に広がっているのが見えます。背後の森の中はほとんど見えない状態です。マント群落は林縁部の日照を利用するために森の側面に発達しています。森の南側には見られませんが、北側にはほとんど見られません。



M地点西側作業後（南から）

・林縁部のコシダ、ノイバラ、マツ、イヌツゲ等を除去したところです。森の中が見渡せる状態ですが、まだかなり暗い状態です。  
・クロミノニシゴリ、ノリウツギ等を選択的に残しています。手前の湿地にあるヌマガヤには手をつけずそのまま残すようにしています。

良いと思います。しかし、葦毛湿原では現状維持を目的にはしていません。今回の作業でM・N地点のマント群落を除去しましたが、これは、森林化してしまったかつて湿地だった部分の復元を優先しているからです。

このP地点は、40年前は木がほとんど見られない草地でした。葦毛湿原には、かつてナガボナツハゼ（愛知県絶滅危惧ⅠA類、愛知県指定希少野生動植物種）が自生していたという記録もありますが、詳しい場所は特定できません。あるいは、このP地点にナガボナツハゼの休眠種子が眠っているかもしれません。木を伐って明るい草地に戻せば、復活するかもしれません。P地点は、今後の経過を観察し、マント群落を除去したことにより悪い影響が見られるのかを判断します。その結果を元に専門家の意見を聞いた上で、40年前のような草地に戻す方が良いのかを判断していきます。

## マント・ソデ群落

マント・ソデ群落とは、森の林縁部を覆っている低木やツル植物等の群落のことです。低木やツル植物の群落をマント群落、一番外側で地表近くに帯状に生えている草本の部分をソデ群落と言います。これらは、森林内に直接風が吹き込むことを防いだり、日光が当たって乾燥することを防いでいるとされています。人間がマントを着ているようなので、マント・ソデ群落と命名されました。ソデ群落を省略して、マント群落と呼称されることもあります。

## 2、ネザサの除去実験

K地点にネザサの除去実験地（K-3地点）を設定しました。平成25年度にK-1地点を設定し、表土を2×5mの範囲で剥ぎましたが、K-1地点では、表土がほとんど流れ出し、礫ばかりの裸地になりました。この状態で観察を続けましたが、わずかに残った土からハルリンドウ、ヌマガヤ等がわずかに発芽しました。また、礫の間からミカツキグサ、シラタマホシクサ等がわずかに発芽した程度でした。しかし、周りから新たに流れ込んで溜まった土からは、トウカイコモウセンゴケ、ケシンジュガヤが多く発芽しました。

今回設定したK-3地点は、K-1地点の3mほど東側で、ネザサ群落になっていた所です。当初、この部分の表土を剥げば、K-1地点と同じように、土が無くなり礫ばかりの裸地になると考えていました。そこで、礫を土手状に積み上げて土が流れ出さないようにするつもりでしたが、実際にネザサの根を除去してみると、K-1地点よりも表土が厚く、下流側半分ほどでは土が残る状態でした。そこで、ネザサの根をすべて除去し、できる限り土を残すという方法にしました。部分的には根を除去する段階で下の礫が堀上がり、かなり強い攪乱が入ったという状況になりました。下流側の右側です。

また、除去したネザサの根には土がついています。この土の中にも埋土種子が含まれているはずですが、このまま実験区の上流部に置くとネザサ群落になると予想されますので、できる限り土を実験区内に戻すこととし、残ったものはネザサの根を裏返して、上流部に敷くことにしました。こうすれば、ネザサの発芽が阻害され、この土の中に含まれている埋土種子が流れ出しても、下流の実験区に溜まるだろうと予想したからです。

この実験区の目的は、ネザサが優勢になったところの土の中にどのような植物の埋土種子が含まれているのかを確かめることです。K-1地点の昨年の結果からは、ケシンジュガヤ、トウカイコモウセンゴケ、ハルリンドウが多く発芽することを予想しています。また、ヌマガヤ、シラタマホシクサ、ミカツキグサも発芽するかもしれません。

いずれにしても、ネザサ群落になってしまったところの植生回復を今後どのように行うかの見通しを立てるための小規模実験であり、この実験結果を元に、より大きな面積を行う方法を検討していきます。



K-3 地点作業前 (10月28日)



K-3 地点作業中 (1月27日)

### 3、島状部の除去

N地点は、あちこちで島状部が発達しています。ノリウツギ、イヌツゲ、マツなどをコシダが取り巻いています。島状部はすべて除去するのではなく、一部を残すようにしています。これは、島状部に依存している植物や動物がいて湿地に何らかの良い影響を与えている可能性も考えられるからです。遷移が進んだ島状部も多様な環境の一部と考えています。

コシダを除去しましたが、盛り上がった内部には、枯れた葉や茎がかなり堆積しており、地表面が見えず、厚いマット状の被覆になっていることが分かりました。草刈り機で刈り取っただけでは、堆積した葉や茎が十分に除去できないので、埋土種子からの植物の発芽が阻害されることが予想されます。どこまで除去するかは、剥ぎ取る範囲や程度を含め、今後現地で実験区を設定するつもりです。



除去した島状部 (画面下部分)